

査読論文

日本占領下華北の在留邦人雑誌に見る「日華親善」の矛盾

菊地 俊介*

要旨

日中戦争期、「日華親善」をスローガンに掲げるいわゆる傀儡政権が統治した日本占領下華北には、多くの日本人が移住し、日本人と中国人が共存する空間が形成された。現地で出版された在留邦人雑誌は、「日華親善」を支えるため、中国人の対日イメージを損ねる在留邦人の「誤れる優越感」を繰り返し批判した。しかし、そうした在留邦人の態度を批判する雑誌の言説にこそ、「誤れる優越感」とも呼べる差別意識が見られた。また、在留邦人雑誌上の多くの議論は、日本人と中国人の差異に向き合う重要性を主張しており、「日華親善」イデオロギーを支える根拠の一つでもあった「同文同種」論は完全に否定されていた。更に、身近な中国人をスパイとして疑う必要性も説いていた。このように、在留邦人雑誌には「日華親善」を説きながら、これと矛盾する言説が少なくない。他にも、在留邦人雑誌には日本人に対して中国人が率直に反感を示す記事があり、中国人に対する言論統制も徹底されたものではない現実と、むしろ中国人の声を聞き出し、これを在留邦人に認識させようとする雑誌の編集姿勢が見える。また、日本人の論説にも「日華親善」をめぐる矛盾に対する指摘や国策に対する疑問を呈するものがあり、比較的幅広い議論が展開できた日本占領下華北の言論環境の一端も指摘できる。

キーワード

日中戦争、日本占領下華北、在留邦人雑誌、日華親善、誤れる優越感、言論環境

はじめに

日中戦争期、日本占領下に置かれた華北は、いわゆる傀儡政権として1937年12月に成立した中華民国臨時政府（1940年3月、華北政務委員会に再編）が統治した。この統治を確立するために、日本軍及び傀儡政権にとって重要だったのは、現地の中国人民衆に日本に対して好印象を持たせ、「日華親善」¹、即ち日本との提携が中国にとって正しい選択だと認識させる教化宣伝工作であった。

特に日中全面戦争勃発以降は、政府や軍関係者、国策会社の社員及びその家族、また商売目的などで多くの日本人が華北に移住し、最も多い時で40万人を超える日本人が住んでいた。日

* 執筆者：菊地俊介

所属／職位：南開大学歴史学院／博士後研究員

連絡先：〒300350 中国天津市津南海河教育園区同硯路38号 南開大学津南校区

E-mail: 16v00232@gst.ritsumei.ac.jp

本占領下華北では、日本人と中国人が隣近所の住人同士として、或いは職場の同僚として、商売相手として日々身近に接することとなった。このほか、日本人の多くは家庭でボーイや阿媽と呼ばれる使用人を雇い、外出時には中国人が引く洋車を利用した。これらも日本人と中国人の身近な接点として挙げられよう。

日本人と中国人が共存する空間が形成された日本占領地区では、「日華親善」は一般の在留邦人の日々の生活態度や中国人への接し方によって支えられるべきものとなっていく。即ち、中国人民衆の対日本認識は、抽象的な親日宣伝工作だけではなく、身近に暮らす日本人の姿に左右されるようになるのである。こうした環境の下、現地で編集、出版された在留邦人向けの日本語雑誌(以下、在留邦人雑誌)には、中国人の特性、中国の風習や文化に対する理解を現地生活の関心事として重視し、また生活空間での「日華親善」の実践という意味も込めて、日本人の心構えなどを説く記事も多い。

その雑誌とは、詳細は本論に譲って誌名のみ列挙すると、『北支那』、『京津ガイド』(改題後『京津事情』、再度改題後『日華文化』)、『興亜』、『燕塵』(改題後『新華北』)、『華北評論』、『華北教育』、『建設戦』などである。このうち『北支那』、『日華文化』、『華北評論』は1944年6月に北京日本大使館の方針により統合され、後述する『月刊毎日』に変わる²。

菊地俊介(2014)は、上記のうち『燕塵』、『新華北』、『華北教育』、『華北評論』、『建設戦』に加え、在留邦人の子供の作文集の言説分析を通して、当時の日本人社会を覆っていた空気を捉えるという問題意識から、在留邦人の対中国認識をめぐる問題、特に優越感や差別意識を論じた。日本占領下の日本人と中国人が共存する空間で生じた相互認識をめぐる矛盾を、同時代資料の言説分析により論じた他の先行研究を挙げるとすれば、満洲国における「五族協和」の虚構を論じた研究が中心となる。最近では細谷亨(2016)が日本人移民の差別意識を取り上げているが、これまでの代表的な研究には日本人の優越感や他民族に対する無関心などを論じた塚瀬進(1998)などがある。また川村湊(1994, 1998)や田中寛(2015)は、満洲国に暮らす日本人の子供の作文を通して、「五族」の一員として自覚できない日本人が抱えた矛盾を指摘している³。このほか、占領統治との関係から論じたものではないが、上海を考察対象とした小島勝(1999)、小川直美(2008)、徐青(2010)も、在留邦人の作文に見える中国人に対する差別意識や無関心について触れた研究として挙げられよう。本稿はこれら先行研究の問題意識を継承しつつも、雑誌の言説分析を通して、日本の対中国統治を支えるイデオロギーである「日華親善」がいかに矛盾した形で論じられていたかを考察する。そのため優越感や差別意識を見出すだけではなく、その論じられた方の考察に重点を置き、「同文同種」論への懐疑や、「親善」の対象であるはずの中国人への不信心などの問題も幅広く捉えていく。

更に本稿では、雑誌上で中国人が日本人に反感を率直に表現していることや、日本人が「日華親善」を趣旨とする国策に疑問を呈していることにも着目し、日本占領地区における言論環境の考察にもつなげる。在留邦人雑誌に見られる国策批判の要素については先行研究も着目し

ており、太平洋戦争勃発以降の中国に暮らす在留邦人の生活困窮をめぐる言説を中心に取り上げた高崎隆治（1993）は、その考察の前段階として華北の在留邦人雑誌には国家の方針や指導性に疑問を呈する記事が掲載されていると指摘する。しかし、高崎が挙げているのは『北支那』収録の1件の記事のみであり、在留邦人雑誌の全体像を捉えるには不十分である。日本占領下華北の在留邦人雑誌『月刊毎日』について、その出版背景から掲載記事の特徴まで総合的に考察した石川巧（2018）は、同誌には国家権力の中核にあった人物の論説を掲載してそれを隠れ蓑にしなが、時局批判とも受け取れる論説や文学作品が含まれていると分析する。そして言論人としての矜持を守ろうとした執筆者や編集者の姿勢を浮かび上がらせると同時に、日本国内ほど検閲が厳格ではなかった日本占領下中国の言論環境へと考察を進めている⁴。加えて、日中戦争期の上海で発行された在留邦人雑誌『大陸』を取り上げ、石川の論じる『月刊毎日』の特徴との類似点を指摘する秦剛（2018）の研究もある。また、上海の日本人社会におけるメディア史を体系的にまとめた和田博文ほか（2014）が、在留邦人雑誌計50誌について1誌ずつその特徴を解説する中で、日中戦争期の『揚子江』と『大陸往来』に国策にそぐわない記事が見られることを指摘している。しかしその解説は、各誌より2件ずつ、中国人への蔑視を戒める記事や中国人農民の救済を訴える記事を紹介するのみであり⁵、その背景の考察には至っていない。このように、日本占領下中国の言論環境の考察につながる雑誌研究の現状は、個別の雑誌を対象とした限定的な研究を積み重ねている段階にある。本稿は性質の異なる複数の雑誌を取り上げ、1938年から1945年までの様々な言説を横断的に読み解くことで、日本占領下中国の言論環境をより広い視野で捉えていく。

I 在留邦人雑誌の概要と本稿の分析視角

本稿が取り上げる雑誌について、菊地（2014）が既に説明している雑誌も含むが、改めて概要をまとめておこう。発刊と終刊の時期については不明のものもあるが、およその発行時期は末尾の参考文献一覧を参照されたい。

『燕塵』、『新華北』、『華北評論』、『北支那』は総合雑誌と位置づけられる。『燕塵』、『新華北』は燕塵会という在留邦人団体が発行したもので、名誉顧問には陸軍中将貴族院議員の肩書きで坂西利八郎、顧問には在北京日本大使館参事官の土田豊などの名前が見られ⁶、軍や政府機関の指導を受けていたことが窺える。『華北評論』は満洲国協和会（1934年、満洲帝国協和会に改称）、次に華北の中華民国新民会（以下、新民会）と、満洲国及び華北でいわゆる傀儡政権に付随して民衆工作を進めた団体で活動していた小澤開策が、新民会を辞した後に発刊したものである⁷。『北支那』は天津で編集された総合雑誌で、現物を見る限り特に政府機関や軍との関係は前面には出てこない。

『華北教育』、『建設戦』は北京日本大使館の管轄下にある組織が刊行した雑誌である。『華北

教育』を刊行した華北日本教育会は、在留邦人教育の資質向上を目的として華北の日本人学校の代表を会員とした⁸。『建設戦』を刊行した華北善隣会は、1940年に北京日本大使館内に設置され、国策会社等で警防工作のほか、「善隣工作」と呼ぶ中国人に対する宣撫工作に携わった。理事長は同大使館錬成課長の三原敏男が務めているが、元々日本人と中国人が共同で参加している団体であり、1944年から中国法人となり、曹汝霖が会長を務めた。北京日本大使館の要職にある人物のほか、華北政務委員会や日本居留民団の幹部が理事に名を連ねている⁹。

『興亜』は代表的な国策会社である華北交通株式会社(以下、華北交通)の社員会が、日本人社員向けに発行した機関誌である。華北交通は日本人と中国人の従業員が共同で働く職場であり、中国人との関わり方も『興亜』の重要なテーマであった。なお華北交通は最も多い時点で3万人を超える日本人社員を擁しており¹⁰、彼ら社員を華北に住む在留邦人の代表的な存在と位置づけても良からう。『京津ガイド』は北京、天津への視察旅行案内サービスを主たる業務とした京津ガイド社が発行した¹¹。改題して『京津事情』となるが、中国事情の紹介という意味で、現地での中国人との接し方について論じた記事も多い。再度改題して『日華文化』となつてからは、日中両国の文化交流を目的として1942年12月に天津に設立された天津日華文化人倶楽部(1943年8月、天津日華文化報国会に改称)¹²の機関誌となった。なお、『京津事情』、『日華文化』の編者である阿鳥羽信は、元々『北支那』の編者であり、『北支那』を離れ独立して『京津ガイド』を発刊したという¹³。

菊地(2014)も言及している通り、在留邦人雑誌には、署名のない記事や、署名はあっても人物像が不明の論者も少なくないが、およそ寄稿者は、政府機関や軍、国策会社の幹部のほか、著名な知識人、新聞記者などが中心である。中には読者投稿と思われる記事もあるが、基本的には庶民の声を拾い上げると言うよりは、庶民を啓蒙する姿勢で執筆、編集されている。

なお、以上の在留邦人雑誌は発行元の性質も対象となる読者層も目的も異なるが、本稿が重視するのは、雑誌の性質の差異を超えて言説に見られる共通の傾向である。

また、これらの雑誌は、特定の団体が発行する機関誌であっても、『建設戦』第1号と第2号以外は組織の内部資料ではなく、公開された出版物であった。『建設戦』は元々国策会社の警防業務に携わる職員を対象に、業務関連の情報を提供する内部刊行物であり、第1号と第2号には奥付に「非売品(部外秘)」と書かれている。しかし第3号から第5号まで、奥付に「本誌の取扱は、毎々申上ぐるように取扱に充分注意し、散佚せぬ様御注意を願ひ度い」とあり、一定の機密性を窺わせるものの、第3号から第9号までの奥付に「本誌は各国策会社等に於ける個人購読者激増の傾向にあり、洵に喜ばしき次第であるが、各会社、組合、団体等に於ては適宜取纏め一括申込み頂き度い」とあることから、非売品ではなく、個人で注文して購入できる雑誌に変わっている。また、第14号の編集後記に、「尚今月号(13号)から『建設戦』を一斉に街の書籍店に出して見たところ、頗る好評で既に売切れとなった店もあるとのこと、うれしい極みです」¹⁴と書かれており、書店で販売を始めたことも分かる。『華北教育』も、機密保

持のために注意喚起するような記述は見当たらず、第4巻第11号から、「従来会員各自に1部宛配布し来りしが時局下用紙の確保及之が節約は最も急務なるに鑑み、11月号より各学級数等を顧慮し各学校大体2部乃至10部位の見当にて配布致し度し」¹⁵と、学校ごとの共用となっている。華北交通の『興亜』も第12号以降、「読み終った『興亜』は留守宅や友人に送らしましょう」¹⁶と、誌面の空きスペースに書かれているのを散見する。社内の機密情報を編集したものではないことが分かる。

したがって、これらの雑誌は、言わば日本占領地区に住む在留邦人の誰でも目にし得るものであった。これらの雑誌にも検閲があり、伏字も少なくない。だが逆に言えば、これらの雑誌上で展開される言論は、検閲を主管した当局が許した内容であり、日本占領地区において書くこと、読むことができた言論である。ここから日本占領地区の言論環境も見えてきよう。

なお本稿では、雑誌に掲載されている個別具体的な団体や活動については深く立ち入らない。また、紙幅の都合上、引用する論説の個別の執筆者に関する説明もほぼ割愛する。以下、雑誌に表れた「日華親善」の捉え方に関する論調を俯瞰的に考察する。

II 「誤れる優越感」批判

菊地（2014）は、在留邦人雑誌には中国人を見下す日本人の態度、即ち「誤れる優越感」を批判する論説も少なくないことを論じている。本稿では「日華親善」との矛盾という観点から、この「誤れる優越感」の論じられ方について考察する。

『華北教育』にある、「支那にいる日本人の責任は実に重大であります。在支那人が善い人であるか、悪い人であるかによって、支那人の日本ならびに日本人に対する認識が変わって参ります。支那の大衆は、私達の日常を見、一挙一動を見て、日本という国はどのような国であるか、日本人とはどのような国民であるかということを考えます。（中略）従って、私達支那に生活しているものの全部が、真に日本ならびに日本人を代表しているものということが出来ます。日本を代表して支那に来ていたという誇りと責任とを持って、平生正しく清く生活し、支那の人に対しても、やさしく接するというようにすることが、私達当然の義務であり、それと反対の行動をとって国恥、国辱をまき散らすようなものは、国家に対して不忠の臣であるともいわれます」¹⁷という言葉が端的に示しているように、在留邦人の態度は、「日華親善」を実践する国策を背負わされたものだったとも言えよう。だが、日本人に対する中国人の印象を損ねかねない「誤れる優越感」に対する批判が、在留邦人雑誌には多く見られる。

「誤れる優越感」批判は、日中戦争期の早い段階では1938年5月発行の『北支那』に見られ¹⁸、日中戦争末期まで各誌で「誤れる優越感」批判は続く。これを問題視しなければならぬ状況が続いていたのであろう。

例えば『建設戦』では軍人と思われる人物が、「過日私は汽車で旅行したがその際に一二等

車内座席の日本人の独占振り、又中国人が傍に来た時に迷惑らしい顔をした日本人、又乗車に関し日本人列車長が中国人と争い押しつけている状況、或は日本語で車内で中国に関し放言する者等を目撃して寒心に堪えぬものがあつた。固より中国人に非な事もあろうが、此の様な事があつては、如何に立派な政策も単なる御題目と中国人は言うであらう。又北京で夜中酔うて洋車夫をたたく日本人もあるようである、民心把握も同生共死も消えてしまう¹⁹と語る。このように、中国人から嫌われるような行為に及ぶ日本人の態度が、「日華親善」を破壊する原因としてたびたび批判されるのである。中には中国人従業員やボーイを無闇に叱つたり殴つたりした結果、恨みを買ひ、日本人が殺されたり会社が襲撃されたりした事件の報告もある²⁰。

だがここで注意すべきは、「誤れる優越感」を批判している論者にこそ、優越感や差別意識が見られることである。

続けて『建設戦』を見ていくと、「日本は東亜の盟主として、10億民族の指導者として、任じておるのでありますが、之は決して10億民族に対する征服者として其の服従の上に臨むものではありません。若し之を然らずとする様な誤れる優越感や悲しむべき旧秩序的帝国主義的意識を固持して居る者がありとすれば、之亦国を誤る反逆者として断固排撃せねばなりません²¹」という記述からも分かるように、殆どの言説が「誤れる優越感」は捨てるべきだと主張しながらも、日本人と中国人は対等ではなく、日本人は「指導者」であることを揺るがぬ前提としている。「指導的大国民日本人たることを充分自覚し真に中国人の輔導者好伴侶」の態度をとるべきことを説き、「自己の独善や誤まれる優越感からのみ判断し相手の心意の動きに何等の考慮を払わず指図したり、日本式に改めることを強要するなどは輔導者としての条件を根本的に欠く」と述べているのも²²、また「華北の原住民」を「新たに戦友となつた」ものと捉えつつも、「同じ戦友であっても吾等は指導的立場にある者としての自負を堅持しなければならぬ」とした上で、「従来屢々見聞する虚な『優越感』を振りまわして徒らに彼等の顰蹙を買う如きは此際奇麗さっぱり拭掃する必要がある」と説くのも同様である²³。『日華文化』でも「大東亜の推進力指導力である日本人が徒らに優越感を懐いているようでは指導力にも推進力にもならない」と「優越感」を批判しつつも、「在留邦人の一人々々が真に指導者たるの品格と気魄と、親切と忍耐力とを持ってゆけば無言のうちについてくる」とあり²⁴、日本人は疑うべくもなく「指導者」なのである。

これらを見ると、日本人が優越感を持つことを全否定しているわけではない。「優越感」と一口に言つても、徒に慢心する優越感ではなく、「指導者」としての自覚を持つという意味での「優越感」は肯定されているとも言えよう。

『建設戦』を発行する華北善隣会の理事長を務めた三原敏男は、同誌上で「心なき一部邦人が、華人を欺騙し、虐待し、弄絡して自ら得たりと為すが如きは正に唾棄すべき反善隣工作である、我等は断乎として之を排撃しなければならぬ²⁵」など、中国人の対日イメージを損ねる在留邦人の振る舞いを「反善隣工作」と呼んで絶えず批判してきた人物である。だがその三原も、一

部の在留邦人の「誤れる優越感」を批判する論説の中で、「我等は須く、真の日本人らしく、親分らしく、兄貴らしく、百川を容るる大海の如く、大腹中に華人民衆を包容し、彼等が求めずして翕然と、我等の周辺に蝟集し来る事、宛も花下自ら徑を成すが如くに指導せねばならぬ」²⁶と述べる。燕塵会顧問の坂西利八郎も、『新華北』で在留邦人を批判しながら、「日本人はよろしく中国人の指導者たれ、とは支那事変以来叫ばれつづけて来た言葉であるが、日常中国人と接触する在華邦人にして、真に指導者をもって任じ得る者が果して幾人あるであろうか。（中略）指導とはいふまでもなく、優者が劣者を強引に導くことではない。兄が弟を教え導くように、はたまに世話をし庇護するように、慈愛と威厳と熱意とを失わずに溢るる温情と周到な注意とをもって指教し誘導すること」²⁷だと述べる。更に『華北評論』には「日本は身心健全な兄であり支那は病弱幼稚な弟」²⁸との表現も見られる。日中両国に明確な上下関係を意識した表現である。なお『興亜』のコラムには、「盟主日本は兄、新生中国は弟。兄は指導者、弟は被指導者」だと述べた上で、こうした認識が「誤れる優越感」だという批判を想定してか、これは「東洋古来の人倫道德」であり「優越云々の考察外である」と自己弁護もしている²⁹。

また次のように、露骨に中国人を見下す言説も少なくない。『華北教育』では、「児童が低劣な中国の慣習に染む事なく、飽まで皇国民としての誇を持ち中国人の指導者として成人せん事を念願するものである」とまで言う³⁰。『興亜』にも、「政治・経済・社会・文化あらゆる面悉く日本に比して中国は格段雲壤の下位にある」と華北交通総務局長が述べる巻頭言がある³¹。また『建設戦』で三原も、汽車で中国人に怒鳴りつける日本人の態度を批判しつつも、中国共産党の地下工作への対策を論じる中で、「世界最優秀と折紙の付いた日本男児が苦力上りの中共の奴等に謀略でやられる筈はない」³²と、中国共産党側に身を置く中国人に対しては露骨に侮蔑する。

このように、在留邦人雑誌には読者に対して「誤れる優越感」を戒めながら、「誤れる優越感」とも呼べる意識を拭いきれていない論説が多数ある。恐らく編者も疑問を抱かず掲載していたのであろう。

中には日本人の優越感を煽る言説もある。『燕塵』の次の論説はその例で、「誤れる優越感」は是正すべきだが、正しい「優越感」なら保持すべきだという。「何も殊更に支那民族の慣習とか伝統に媚態をつくす必要もなければ、彼等の顔色ばかりをうかがっている必要はないはずである。東亜の新体制を指導する我々である以上は指導者としての意識をもって彼等に対すればよい。日本民族の優越性を誇らかに示してよいわけではないか」というのである³³。

次に挙げる『新華北』の論説も同様である。「屢々問題となるのは日本人の誤れる優越感による思想行蔵である、誤れるという形容詞は単り優越感に限らずあらゆる部面において払拭されねばならぬ」としながら、「しかしこの形容詞のためにその下に続く優越感までも抹殺すべきものではない、わが大和民族は世界における優秀民族である、大東亜10億の民族中最優秀の民族であることは炳乎たる事実である、日本の主導性なくして大東亜共栄圏の確立はあり得な

い、優越せる国民が優越感を抱くことは最も正確なる自己認識である。(中略)われらは大東亜は勿論世界第一の優れた国民であるとの矜持と自信を恪守しもって後進中国民を誘掖援助すべきである、唯優越せるが故の倨傲、驕慢を厳に戒め謙虚、懇切を旨とすることは優越国民として当然の心構えであることを須臾も忘却してはならぬ、正しき優越感の把持、廉潔を守ることに精励であることは日本人本来の特性であり、中国にあっても微動だにするものでない所かむしろいよいよその特性を発揚することによって新事態に処する中国の一大躍進が期し得られるのである」という³⁴。

だが、「誤れる優越感」をめぐる論調も一樣ではない、以上の矛盾を含んだ論調に比べて少数ではあるが、中には「指導者」という意識も捨てるべきだという議論も見られる。『興亜』では、「自分は日本人だ、優秀人種だ、指導国民だという意識をもち『指導してやる』という気持で対したのでは、反感をこそ与え、大東亜共同宣言を体現し、日華相携えて大東亜の新建設に邁進するという域には達し得ない」³⁵と述べる。『華北評論』の論説にも同様に「中国人に対する職場職能の間に於ける懇切なる協力指導は勿論必要であるが、民族間の徒らな指導意識は却って害となる場合が多い。優劣差別観のある所には、真の友情は湧くものではなく、又正しい民族融合も可能ではない」³⁶とある。このように論調に幅があることも、在留邦人雑誌の特徴の一つとして指摘しておかなければなるまい。

Ⅲ 「同文同種」論への懐疑

日本と中国の「同文同種」論は、「日華親善」イデオロギーを支える根拠の一つでもあった。『京津事情』では中国へ渡航する日本人への注意事項に「同文同種の東洋民族として和衷協調の緊要は理の当然にして苟も誤れる優越感を以て友邦民衆に対し越軌苛酷の処遇あるべからず」³⁷とあり、また『興亜』を見ると、鉄道路線防衛に従事する愛路少年隊の中国人少年へ日本内地の小学生が送った手紙に、「東亜新秩序」の実現は「同種同字の日・満・華この3ヶ国民の完全なる連結合同によらなければならないと誰しも考えていることです」³⁸とある。このように、在留邦人雑誌でも表向きのスローガンとしては、「同文同種」論は生きている。だが、在留邦人雑誌で重点的に議論されていることは、実際に生活空間を共有する日本人と中国人がいかに摩擦を避けて共生するかであり、それを見ていくと殆どが「同文同種」を否定する言説である。

例えば職場では、日本人はせっかちだが中国人は急ごうとはしないなど、互いの特性、文化的差異を理解しなければ融和は不可能であると盛んに議論されている³⁹。『日華文化』にも、在留邦人の「反善隣工作」を批判する中で「日本人は由来単純、無技巧であり、且つ気短かであります。これに対しまするに社会的修練を積み悠揚たる中国人士を以てするとき、ややとすれば意思の疎通を欠き意外なる反感を招き易いのであります」⁴⁰との指摘がある。

中には「同文同種」論を正面から否定する言説も見られる。『京津事情』では、「興亜の根本

は、支那を日本文化に心酔さすように導くと共に、日本文化を根幹として、中国文化の優秀性を撰取融合して、新しい世界文化建設に邁進する事ではなからうか。それには先づ第一に日本人の頭より日本と支那とは同文同種なりと云った誤まれるスローガンを除去する事である⁴¹とあり、更に『華北評論』でも、「同文でも同種でもないことは少しく注意すれば判る筈であり、むしろ日本人は今はっきりと支那人を異民族として見直すことが必要ではないか。日本人は飽くまで日本人、支那のことは何も知らぬ、と最初から出直してこそ、始めて真の支那の核心を掴み得るのではないか⁴²」との記述がある。

また、前章で見たような寄稿者が無意識に抱いている「誤れる優越感」も、「同文同種」論の否定につながっている。即ち、日本文化の優位性を主張することで、結局は中国文化との差異を強調しているのである。華北善隣会の署名で『建設戦』に発表された論説「善隣工作は興亜運動なり」では、「日本も中国も共同であり同一であるが、其の基礎たる精神に於て、又其の負担すべき責任の軽重に於ては、必ずしも同一ではないのである」と述べ、日本は「悠久3000年の歴史を通じ脈々として流れたる我が肇国の精神」である「八紘為宇」の精神を持っているが、中国には「斯かる光輝ある歴史も一貫したる伝統」もないので、日本の方が責任が重いのだという⁴³。

一方で、菊地（2014）も言及したように、日本人が逆に中国に迎合し過ぎているという指摘も見られる。『建設戦』でも「単に華人に同化し附和するを以て日華親善なりと速断すべからず特に之に阿諛迎合して媚態を呈するが如きは厳に戒めざるべからず⁴⁴、『北支那』でも「今では一般的に日支親善が叫ばれ現地の或方面では極端に支那人の機嫌を取るが如き親善振が実現して居る⁴⁵とあるが、以下に見るように日本人の「同化」現象を戒める言説の中にも、「誤れる優越感」とも呼ぶべき意識が見取れる。

『京津事情』には、中国人は「文化も生活程度も低いが、旺盛な生活力と偉大な同化力をもつ」として、「一般に中国人は功利的であり、実行的であり、民本的であり、社会的であり、革命的であると言われる。こうした思想が我国国民性と相容れない点のあることは勿論であり、皇国民錬成の環境としては好ましいものでない」と述べる⁴⁶。『華北評論』でも「一般在留邦人の質は由来必ずしも優良とは言い難く、所在に支那悪に同化されて祖国の信望を裏切る者を見る状態である」と、「支那悪」という表現で中国を見下す⁴⁷。また『興亜』に、在留邦人が「共に語り、対等に敬愛せんとする中国人が、余りにも感激性に乏しく、余りにも無学文盲であり、余りにも現実主義者であり、余りにも不潔である」ため、日本人の「誤れる（？）優越感」は抑えようもなく、中国人の「全国土を覆うてその生活の底流に潜む個人性及び享楽性」が、「日本人の殉国の精神を不識の間に蝕む怖れなしとしない」とあるのも、中国人を見下しながら、日本人がその影響に染まることを恐れる言説である⁴⁸。

更には、日本人が中国人を「同化」させれば良いという主張さえも見られる。菊地（2014）も『華北評論』の「華北の各種学校等をますます濃厚に日本化せしむるのみでなく、盛に日本

側学校を華北に設立し又盛に日本に留学させる。政治、経済、文化等の他の一体化運動と協力して、日本的中国人をできるだけ多数に造成する』⁴⁹という論説を取り上げているが、こればかりではなく先に引用した『新華北』の論説でも、「中国古来の伝統、習俗は無論尊重しなければならぬが、本質的に国民性を異にし風俗習慣の違う日本人が大陸に在るが故に一から十まで悉く中国人を模倣し、これに同化せねばならぬ理由は毫もない、伝統的に優れた中国人の一種の政治性はどんなに真似て見たとて到底及ぶべくもない、そしてその他の点だけ同化したならば日本人本来の優秀性を没却した中国的日本人に成り下ってしまう、(中略)中国の伝統がどうであろうと廉潔はあくまで厳守し、中国側を同化して行くのが真の同生共死の道である』⁵⁰と、日本人の「廉潔」を優位に位置づけて中国人を「同化」させることを肯定している。

いずれにせよ、これら「同化」の議論の背景にあるのは、日本と中国は文化も民族の特性も異なるという認識に他ならず、結局、「同文同種」論を否定しているのである。「同文同種」論は、実際に日本人と中国人がいかにして共存すべきかを議論する中では、完全に崩壊していたと言えよう。

但し、在留邦人雑誌では、これに関する論調も一様ではない。中には『北支那』のコラムのように、在留邦人は日本食の取り寄せなどせずに、中国を理解するために「もう少し支那人の生活に近づいたらどうだろうか」と提案し、「味噌汁の味をわすれず、日本精神を毫も殺さずして、寧ろ発揚させて支那人に同化し、支那人を同化させ、日支親善の実をあげねばならない」という主張もある⁵¹。これなら「同化」とは言え、両者は対等である。『興亜』には、華北交通が「愛路工作」と呼ぶ鉄道沿線の住民に対する宣撫工作の体験談が掲載され、「結局中国人は日本人とは人情風俗習慣が違うので、独善的な日本人化主義では到底不可と感じ、能う限り中国人の中に融け込んで行くように努力しました」⁵²と語られている。また、ある駅長の体験談には、「村民に好かれるためには、先づ相手を中国人と見る考えをなくすること、日本人と一視同仁に見ることである」⁵³ともある。ここでも言説に幅があることは指摘しておきたい。

IV 中国人に対する不信

在留邦人雑誌には、身近に接する中国人がスパイである可能性を疑うよう、警戒を促す記事が見られる。

『建設戦』に掲載されている「匪情蒐集要領」には、使用人である中国人への接し方について、「彼等に対しては決して家庭を開放せざること。又俄に全幅の信頼を繋ぐべからざること」⁵⁴とある。大使館囑託の隈元早苗も、復古の焼却を中国人のボーイに任せたところ、他の紙工場に流された職場の事例を挙げ、スパイに買収されかねないと注意を促している⁵⁵。

日本人と中国人が共に働く職場で、日本人同士が結束して中国人に注意するよう呼びかける

言説も見られる。『建設戦』の「中国人の民族的特性」という連載は、10年以上中国に在留する「所謂『支那通』」の日本人や、中国人を使役する工場や会社の人事担当の日本人から聞き取って、在上海大使館総務部情報調査課思想班がまとめた記事であるが⁵⁶、華北でも参考に値すると考えて掲載したのであろう。ここでは、「日本人側において、中国人の乗すべき間隙をつくらぬ用心が肝要である。（中略）団体でも会社でも先づ日本人同士が固く団結して一糸紊れざる態勢をとることが必要である。この用意を欠くと、中国人をして無用の策動をなさしめる結果になる」⁵⁷とまで言う。北京大使館からも、「敵の地下工作は潜行的に益々猛威を加え其の細胞組織は華人従業員に迄及ぼんとする現況に於て之を等閑視するは適当ならず」と注意を促し、「会社等の内部に対する偵諜をも怠るべからず」と、更に「特に会社等は其の中国従業員は勿論周辺住民の思想的動向に深く注意し」なければならないという⁵⁸。即ち自社の中国人社員をスパイとして疑うことも必要だというのである。また、警防対策について論じる中で、「下層華人」には重要施設の警備をさせてはいけないうもいう⁵⁹。「下層華人」はスパイの潜入を防げない、或いはスパイと協力関係になり得るといふ疑念の表れであろう。

『興亜』にも、「若松部隊長」という署名で、軍からの注意が掲載されている。中国人社員のスパイ活動防止のために、「出来る限り一定の地域に集団生活を行わせ、これに隣保組織を取入れ、連帯責任制を採用するほか、同民族幹部を現地に常駐又は分派して下級従事員の人心に全安感を与えること」としながら、「又職場全体を極力小単位の組別とし、且つ少くも組長は日人として、単に業務上のみならず私生活の傾向迄も監視せしめ、警務員に強権を与えて、逃亡の場合の非常措置をあらかじめ決定しておくこと等である」と、更に「又スパイ防止の手段として、幹部の人選に注意することは勿論、その指揮掌握を至厳ならしむると共に、地区及び業務種別により軍事的重要な程度に応じ日人の全面的配置を実施することが肝要である。又特殊作業で監視不可能になる作業（例えば重要部分の熔接等）は日人を以て充当し、止むを得ざる場合には各職場ごとに必ず日人を配置するか、又は優秀なる華人従業員をして内面的に監視せしめるが如き手段を講じなければならない」と、日本人による監視の必要性を説く⁶⁰。

『京津事情』には現地の会社の幹部や領事館職員、憲兵隊などが集う防諜座談会の内容が掲載され、中国人に倉庫を放火されそうになった体験から、陸軍憲兵准尉の近藤益一が、「1人の苦力の出入さえも注意されたいと思います」と呼びかける。陸軍憲兵少尉の高山国光は、「会社自体が一人々々の中国人の行動に注意を払い特に外国人との連絡のある無しなど余程慎重に気を付けて貰いたい。〇〇でも曾って炊事の中国人が諜報していた例があります。〇〇〇は金さえやればどうにでもなる者が多いから」と⁶¹、伏字はあるが中国人のスパイ活動への注意を呼びかけていることは分かる。

先に挙げた大使館囑託の隈元は、「過度に警戒し過ぎて相手に不快の感を与えては、反って日支親善、善隣友好の本旨に反する結果を招き、やがて齎らさるべき大東亜共栄圏建設に対する障害は亦甚大なるものあるを銘記せねばならぬ」⁶²とも指摘し、その矛盾を理解していたの

だが、以上のように身近な中国人を疑わざるを得ないのが実態であった。

こうしたスパイ工作防止のためにも、「誤れる優越感」を是正し、生活空間での「日華親善」が必要なのであった。先に見た北京大使館からの指示にも、「華人に対する誤れる優越感の發揮、殴打、暴行、村民に対する過重負担等の反善隣工作は彼等の反感を高め遂には敵匪と通ぜしむるの結果に陥るものなるに付十分注意すべし」⁶³とある。汽車で見た日本人の態度を批判する前出の論説でも、「中共の巧妙な宣伝に対する対策は何かと言えば、何も特別な事はない一人一人の日本人が、道義的態度を以て中国人に接するより外に大きい事は無いと信ずるのである」⁶⁴と述べている。即ち、中国人が日本人に反感を抱くと、「敵匪」即ち中国共産党のスパイ工作に協力しかねないと見ている。『興亜』では、「手近の中国人のよき友達となり、つまらない優越感を捨てて身を以て範を示し、我等を信頼させて所謂東亜解放の理念を充分納得するように仕向けたならば、少くとも自分の周囲の中国人の側へは共産思想、抗日思想は近寄れない筈である」⁶⁵と説き、『新華北』では剿共の方針の一つに、「優秀な中国人^{マツ}そして(引用者注:「をして」の誤りか)傍觀せしめたり反対の側へ追いやるような独善と誤れる優越感の払拭」⁶⁶を挙げている。

V 中国人の反発

日本占領下華北では、日本軍及びいわゆる傀儡政権によって中国人に対する親日化工作が進められ、日本を批判する言論や思想は統制されていたと一般的には理解されよう。確かに『京津事情』に掲載された日本語学習者の中国人の作文などを見ると、中国を脅かす中国共産党を退治してくれる日本軍に感謝するなどといった日本賛美に溢れている⁶⁷。だが、在留邦人雑誌には中国人が日本人に対して率直に不満や反感を表現していることを取り上げた記事も少なくない。

『華北評論』には「柯」という署名の中国人が、「中国人は戦時気分が未だ去らず、日本人を怖れている為に、日本人に悪い事をされても、後難を恐れて、警察に訴える勇気がない」ので黙っているが、「心の中で日本人を憎むことは否定出来ない、一般中国人共通の心理である」という⁶⁸。この論説の副題は「中国知識人は斯く云ふ」である⁶⁹。庶民が直接言えない感情を知識人が代弁する形であろうが、見方を変えればこの論説自体が、中国人が日本人に率直に反感を伝えている一例でもある。

『興亜』には、編者が小中学校の日本人教員から収集した情報だとして、中国人の目に映る日本人の否定的なイメージを列挙している。そこには服装や生活態度がだらしないといった批判も多いが、「日本人は恐らく全部といたいほど誤れる優越感を持って暴言を吐き、腕力を振り、中国人を侮辱迫害している」など、「誤れる優越感」も含まれている⁷⁰。また『華北評論』や『新華北』は、在留邦人の「誤れる優越感」を批判する文脈で、日本内地を視察した中国人

が、「内地の日本人は非常に好い、まるで中国に来ている日本人とは人種が違うのではないかと思われる程だ」⁷¹という感想を述べたことを取り上げている。他にも、『京津事情』は洋車夫の声を聞き出している。本来なら10銭か15銭の運賃を支払うべきところを5銭しか支払わずに睨みつけてきた日本人の例を挙げ、一方で先に運賃を決めても睨みつけられるが「この例の如くでは先に決めてからでないかと不安心で走れぬではないか」と不満を述べ、日本人を避けたがる洋車夫のことも「人相や風采を見てからでないかと乗車を求めぬ理由も大いに察して戴き度い」というのである⁷²。

より直接的な反発の声も見られる。華北交通常務理事の加藤新吉による『興亜』の巻頭言では、「排日中国人に、日本人のどこが嫌いなのかと聞いてみたら、日本人の言うことすることすべてが癖に障るんだと答えたそうである」⁷³と述べている。誰が尋ねたのか、「排日中国人」とは誰なのかも不明だが、日本人の耳に入る形で中国人が反発を表明していたことは確かである。また『北支那』を見ると、「財団法人青年文化会、東亜文化圏の会勤務」との肩書きのある鈴木善一が、中国人青年学生500人と語り合ったところ、彼らから不満が噴出したという。鈴木がまとめるところによると、その不満とは「日本人は性急で甚だ強制的である。驕慢にして支那人を軽侮する。（中略）日本人は小事に怒り人を撲る。支那人の生活を困難にしたのは日本人なり」と、更に「日支両国人は経済的、文化的に平等待遇をなさるべきこと、日支基本条約を実行すべきこと、宣伝のみ多く実体なきは遺憾なること、和平建国したのであるから鉄道、航路等を返還せよ、軍隊を中国より撤回せよ」というものもある。鈴木はこれらの声を、「支那の青年学生等は、未だ必ずしも総体的に時局を認識せず」と退けるのだが、それにしても中国人が日本人に対して面と向かって反発の声を上げていたことが分かる⁷⁴。

『建設戦』に掲載された、北京日本大使館囑託の中平常松がまとめた「某中国人」の声をみてみよう。この中で、「某中国人」は「日本人としても、大に反省して貰わなければならぬ処が少くないと思います」と述べ、「吾々は幾度日本の下層人に侮辱され、時には腹に据え兼ねた事があったか唇を噛みしめて涙を呑んで我慢したのです、之等は毎度の事で、今は諦めて居るが夜城門を通るときは中国の高官の者と雖も、日本の〇〇の前で自動車を下りねばならぬ、夫れ丈けなら未だ良いが、其時に高官の者が〇〇に敬礼しても日本の〇〇はロクナ答礼もせぬ、（中略）又中国人は日本の高級者に敬礼しても、日本人は決して中国の高級者に敬礼をしない。そんな日支提携が何処にあらうか」と不満を吐露し、「日本の総ての人がもっと中国人を人間らしく本当の善隣友好の同種同文の人として取扱って欲しい」と結んでいる⁷⁵。

中国人自身の署名で掲載され、中国人自身が日本人を批判する記事もある。先に挙げた「柯」という署名の論説もそれに該当するが、『興亜』の「中国人の立場から」という記事では、華北交通の開封鐵路局所属との肩書きのある辛慕韓という人物が、「日人高級社員の華人に対する態度は謙遜丁寧で敬服の至りではありますが、ただ極少数の日本人社員の中には、まだその傲慢軽視の態度を改めず、見るに堪えないものがあり、これに因り誤解を生じ衝突を起している

のであります」⁷⁶と、日本人社員を批判している。また、劉汝翼という人物は、「日本人として注意すべき事項」として、「百害あって一利なき優越感は徹底的に捨て去ること」を要求している⁷⁷。その他、日本人はせっかちで、「日本人が中国人に何かいいつけた場合、快々の（引用者注：中国語で「速く」の意味）やらなければ怒ります。洋車の上で『快々の』を連発しているのは日本人だけのようです」⁷⁸という声も掲載されている。職場内で日本人と中国人の従業員間に起こる文化摩擦を例えたものであろう。先に挙げた中平の記事にある「某中国人」は日本人に「同種同文」として中国人を尊重するよう要求しているが、こちらは逆に互いの差異を理解する必要性を主張しており、中国人側からの声にも「同文同種」否定論に行き着くものが見出せる。

また、新民会の副会長であった喻熙傑も、三原敏男との対談で「反善隣工作」について論ずる中で、中国人の洋車夫が日本人に対しては日本人であることを理由に余計な運賃を請求するなど、中国人側の問題を認める一方で、日本人の煙草店が中国人には売らないことも批判している⁷⁹。

ここから、「日華親善」のイデオロギー宣伝の下、その方向へ思想言論が統制された日本占領下華北にあっても、中国人が日本人に対して率直に反発する言葉を口にしてきたことが分かる。加えて注目したいのが、在留邦人雑誌という公開された言論の場において、中国人による日本人批判を掲載していることである。『興亜』を見ると、華北交通では中国人従業員にさせた討論会の中で、中国人、日本人のそれぞれの欠点と長所の両方を挙げさせたという⁸⁰。同様の事例は『建設戦』で言及されている女学生の討論会にも見られる⁸¹。その議論の内容までは不明だが、中国人に理想化された日本人イメージを鼓吹するばかりではなく、中国人から見た現実の日本人の問題点も議論させていたことは分かる。「日華親善」を進めるためには耳が痛くとも日本人が一定程度中国人の本音を把握する必要性があったこと、また一方では中国人に語らせることでガス抜きさせる意図もあったことが考えられよう。更にこれを雑誌に掲載した背景には、中国人の反発という現実の問題を敢えて見える形にし、在留邦人間で共有させようとした編集方針が窺える。占領統治下ゆえの言論統制という一般的な理解とは異なるこのような言論環境の一面は、日本の占領統治の実態を考察する上でも注目すべきであろう。

VI 「日華親善」の矛盾を指摘する言説

在留邦人雑誌上には、「日華親善」をめぐる矛盾に気づいている論者もいた。前章で挙げた「柯」と署名された論説が、「平和な時に親善を謀る事さえ容易でない。戦の未だ止まない時に、両国民の融和を謀ることは、尚更困難である」⁸²と指摘している通り、そもそも日中両国は戦争中である。『建設戦』の前掲「善隣工作は興亜運動なり」でも、「殊に日本は中国とは最近まで戦争をして居たのであり、且つ一部では今尚戦を継続して居るのであるから、互に戦争の相

手方だった日本と中国との提携合作はしかく簡単に実現し得るものではない⁸³と述べ、その事実を客観的に捉えている。

更に『建設戦』では、「日華善隣」と併せてしばしば持ち出される「同生共死」というスローガンに対して、「今迄頭を叩かれ、中には親兄弟を戦争で失った中国人には言わば仇である日本とどうして無理心中をせねばならんのか、皆中国人はそう思っています⁸⁴と、日本が加害の立場にあることを率直に認めている。

更に『新華北』や『建設戦』に多く寄稿している高木健夫の論説を見てみよう。まず『新華北』を見ると、「わたしは『親善』という言葉が嫌いである」と述べ、北京日本大使館の主催事業である「日華善隣週間」を批判している⁸⁵。これは1943年11月15日から21日まで、職場や学校で「善隣工作の真髓を理解せしむる」ために講演会、座談会、表彰など様々な活動を行ったものだが⁸⁶、高木は、「『善隣』に御叮嚀に『工作』などという、あからさまに謀略的なひびきを与える（主に日本人についての影響だが）いらざる言葉をくつつけること」に対して異議を唱え、「善隣週間は、その週間、つまり、日曜日にはじまって土曜日に終るというユダヤ人的な七曜意識をふりかざして、善隣工作をやり、(此の間五行削除)」という⁸⁷。一時的に「善隣」を装うだけの欺瞞に過ぎないと言いたいのであろう。『建設戦』でも同じように、「善隣には『工作』という文字は不要である」と述べ、「善隣は、あえて意識すべきものではないとさえいい得るかも知れない。善隣を意識するときその人の行為には、いろいろな影が付き纏う。『俺は日本人だぞ』という影。『お前は中国人だぞ』という影。『俺はえらいのだ。指導民族だ』という影。『お前は俺のいうことをきけばいいのだ』という影」という⁸⁸。高木の視点は、日本人が「指導民族」であることや日中両国が「善隣」の関係を築くこと自体に根本的な疑問を呈するものではなく、その手法を問題視するものであるが、在留邦人雑誌には「日華善隣週間」という大使館主催の国策事業に対しても、このように直接的な批判が見られるのである。

既に言及したが、在留邦人雑誌の論調には全体的に共通する方向性はあるものの一様ではなく、対立する見解も含めて幅広く掲載されている。上記の高木のような言説を封じるには至っていない。戦争をしながら「日華親善」を唱える矛盾を加害の立場を自覚しつつ指摘する論説も掲載した⁸⁹在留邦人雑誌は、国策に根本的な疑問を呈する議論も展開できる雑誌という側面も持っていたと言えよう。

おわりに

本稿では、日本占領下華北における発行元や発行目的も異なる様々な在留邦人雑誌を横断的に読み、その共通点を捉えつつ、日本の占領統治を支える「日華親善」イデオロギーをめぐり矛盾した言説について考察した。まず見てきたのは、「日華親善」の実践者として言わば国策を背負うことになった在留邦人に対して、これを損ねる「誤れる優越感」の是正を説きなが

ら、その論者自身が日本の指導的立場を疑うべくもない前提としているために、「誤れる優越感」とも呼べる意識を拭いきれない多くの言説である。また在留邦人雑誌は、日本人と中国人が生活空間を共有する中で生じる現実的な問題を捉えている。両者が共存する日本占領下の社会では、その差異に向き合う重要性の方が増しており、「日華親善」イデオロギーを支える根拠であった「同文同種」論は否定されていた。更に、「親善」の対象であるはずの中国人をスパイとして疑う言説も、「日華親善」イデオロギーと矛盾した現実を反映した言説として指摘できる。

また、本稿では日本占領下華北の言論環境を考察することも課題とした。日本軍やいわゆる傀儡政権が「日華親善」イデオロギーを宣伝し、中国人の親日化を進める環境下で出版された在留邦人雑誌であるが、中国人が日本人に対して不満や反感を率直に表現していた現実も描写されている。それが公開された出版物である在留邦人雑誌上に、日本人に見える形で記述されていたこと自体も注目すべきであろう。ここから考えられることは、現実の中国人に対する言論統制も徹底されたものではなかったことと、中国人の声を聞き出し、在留邦人にそれを直視させようとした在留邦人雑誌の姿勢である。更に、在留邦人雑誌には上述の「誤れる優越感」をめぐる議論にしても対立する見解を含めて幅広く掲載されており、中には日本人の論者の一部からも加害の自覚、国策として実施する事業に対する疑問など、「日華親善」をめぐる根本的な矛盾を指摘する議論が展開されていた。近年の研究で、在留邦人雑誌の時局批判、国策批判の要素が指摘されているが、本稿で取り上げた在留邦人雑誌からは、「日華親善」、即ち対中国占領統治をめぐる議論に同様の傾向を見出すことができる。

注

- 1 「日華親善」は固有名詞ではない。同時代資料上の表記は「日支親善」、或いは「親善」に限らず「善隣」、「提携」など様々である。本稿では、日本と中国が敵対せず提携すべきだという当時の国策やイデオロギーを広く指して「日華善隣」という表現を用いる。
- 2 東亜新報天津支社編『華北建設年史』、1944年、社文55頁
- 3 田中(2015)所収の論文「『満洲国の私たち』に描かれた真実」。このほか、同書所収の論文「戦争が遺した日本語(1)」では満洲国に限らず日本占領下中国の在留邦人の子供の作文も紹介されているが、踏み込んだ考察はされていない。
- 4 日本占領下の華北と華中の検閲体制については、堀井弘一郎(2016)が考察している。
- 5 和田ほか(2014)、390-391頁
- 6 『燕塵』第2巻第9号、1942年9月7日、86頁、『新華北』第3巻第4号、1943年4月7日、105頁など。
- 7 菊地(2014)、274-275頁
- 8 同上、275頁

- 9 華北善隣会について、いかなる団体であるかを知る手掛かりは現時点では乏しく、「財団法人華北善隣会の概要」『建設戦』第29号、1945年1月1日、84-88頁など『建設戦』自体の記述と、前掲『華北建設年史』、社文47-48頁にある簡単な解説に依るしかない。なお、同会は中国語雑誌『敦隣』も発行している。
- 10 平田驥一郎「われ指導者なり」『興亜』第22号、1941年4月1日、1頁
- 11 京津ガイド社編「特輯京津ガイド」『京津ガイド』記念号、1939年1月1日、93頁、「本社の事業案内」同上、107頁
- 12 「編輯後記」『日華文化』第6巻第8号、1943年8月1日、88頁
- 13 飯島良太郎「困難な雑誌経営」『京津事情』、1940年7月1日、30頁
- 14 「編輯室より」『建設戦』第14号、1943年10月1日、72頁
- 15 「会誌『華北教育』刷新ニ関シ会員各位ニ告グ」『華北教育』第4巻-第11号、1943年3月11日、42頁
- 16 『興亜』第12号、1940年6月1日、33頁。以後も、文言は統一されていないが、同様の趣旨の記述が誌面に見られる。
- 17 石川順「支那の民情」『華北教育』第3巻第10号、1942年9月1日、7頁
- 18 山田武吉「在支日本人に告ぐ 大国民の襟度を以て進め」『北支那』第5巻第5号、1938年5月1日、20頁。「満洲問題の解決した当時、『誤まれる優越感を去れ』と題して、予は在満日本人に一言したが、北支及び中支に發展するについても、我々日本人は先づこの謬まれる優越感を去ることが第一の要件である。苟くも大国民を以て任ずるならば、弱き者や劣れる者を引立ててやるのが当然で、他の劣弱に付け込み、これを圧迫して自己の發展をのみ計るのは、決して大国民たるの資格を備えたものでない。支那の漢民族には種々の民族的欠点があるから、之れに注意すべきは勿論なるも、大きな愛の包みに氣永れて行く教化、啓発、指導して行くなら、漢民族の民族的欠点もこれを矯正し得べく、彼等をして我れに帰服せしめ心服せしむることも出来るであろう。」
- 19 K少佐「華北に於ける思想戦に就て」『建設戦』第19号、1944年3月1日、9-10頁
- 20 警防室「警防上の参考実例(3)」『建設戦』第3号、1942年10月15日、53頁
- 21 神子勇「興亜運動と日華善隣」『建設戦』第17号、1944年1月1日、44-45頁
- 22 川久保清「日華善隣の大道」『建設戦』第17号、1944年1月1日、47頁
- 23 辻助邦「優越感」『建設戦』第9号、1943年4月15日、13頁
- 24 太田知庸、栗原一男対談「日華同盟と東洋精神の問題」『日華文化』第6巻第11号、1943年11月1日、3頁
- 25 三原敏男「善隣工作は神業なり」『建設戦』第2号、1942年9月15日、33頁
- 26 同上
- 27 坂西利八郎「在華同胞に望む」『新華北』第3巻第7号、1943年7月7日、4-5頁

- 28 橋一民「新しき文化工作推進に関する論議」『華北評論』第1巻第9号, 1940年7月1日, 23頁
- 29 「軼轍人語」『興亜』第46号, 1943年4月1日, 7頁
- 30 飯野岩雄「現地に於ける精神教育」『華北教育』第4巻第12号, 1943年12月1日, 33頁
- 31 前掲平田驥一郎, 1頁
- 32 三原敏男「冬の旅」『建設戦』第19号, 1944年3月1日, 29頁
- 33 四ツ橋銀太郎「支那への認識」『燕塵』第1巻第1号, 1941年1月1日, 56頁
- 34 村上貞一「大陸の日本人」『新華北』第3巻第8号, 1943年8月7日, 51-52頁
- 35 小田英雄「善隣協和の道 まづ理解と信頼」『興亜』第62号, 1944年10月1日, 21頁
- 36 青砥継男「青年と錬成一華北興亜錬成所開所に当り」『華北評論』第4巻第7号, 1943年7月1日, 17頁
- 37 「特輯京津案内」『京津事情』, 1939年10月1日, 11頁
- 38 「愛路少年隊諸君へ 日本少年から感激の手紙」『興亜』第18号, 1940年12月1日, 31頁
- 39 「おたづね」『興亜』第37号, 1942年7月1日, 17頁, 前掲三原敏男「善隣工作は神業なり」, 33-34頁
- 40 丁子重春「反善隣工作の撃滅」『日華文化』第6巻第12号, 1943年12月1日, 3頁
- 41 伊坪伊那太郎「戦跡に佇みて感あり」『京津事情』, 1939年6月1日, 14頁
- 42 志摩淳「『所謂親善』と『無頓着』の横行」『華北評論』第1巻第10号, 1940年7月15日, 26頁
- 43 華北善隣会「善隣工作は興亜運動なり」『建設戦』第11号, 1943年6月15日, 3頁. やや字句に相違があるが, 横山壽「興亜運動と善隣工作」『新華北』第3巻第8号, 1943年8月7日, 15頁も同様の文意である. 横山壽の肩書きは華北興亜翼賛会本部総務部長.
- 44 在北京大日本帝国大使館総務部長「相寄る魂 国民と国民の結盟が必要 (日華善隣週間実績講評)」『建設戦』第17号, 1944年1月1日, 11頁
- 45 木庭廣延「支那国民性と日支親善」『北支那』第7巻第8号, 1940年8月1日, 14頁
- 46 石田住次「綴り方と現地児童読物の関係(1)」『京津事情』第5巻第5号, 1942年5月1日, 63頁
- 47 石原巖徹「大東亜戦争の因由と北支の相関性」『華北評論』第3巻第1号, 1942年1月1日, 7頁. 他誌の記事の署名は「巖」ではなく「巖」の字. 例えば石原巖徹「回首津門漫話(7)」『京津事情』第5巻第12号, 1942年12月1日, 51頁, 石原巖徹「華北事情案内所の構想」『新華北』第3巻第6号, 1943年6月7日, 52頁など.
- 48 小山生「声」『興亜』第41号, 1942年11月1日, 24頁
- 49 一氏義良「華北文化工作の重点」『華北評論』第1巻第6号, 1940年5月15日, 26頁
- 50 前掲村上貞一, 50-51頁
- 51 「道聴途説」『北支那』第5巻第10号, 1938年10月1日, 16頁

- 52 星野信隆「愛路に挺身するもの 後埧の下園氏夫妻を訪ふ」『興亜』第43号, 1943年1月1日, 7頁
- 53 石橋宗雄「愛路のコツ」『興亜』第54号, 1943年12月1日, 15頁
- 54 「匪情蒐集要領」『建設戦』第10号, 1943年5月15日, 65頁
- 55 隈元早苗「「スパイ」に就て(2)」『建設戦』第8号, 1943年3月15日, 15-16頁
- 56 「中国人の民族的特性(1)」『建設戦』第16号, 1943年12月1日, 29-30頁
- 57 「中国人の民族的特性(4)」『建設戦』第19号, 1944年3月1日, 76頁
- 58 「北京大使館総務部長より指示せられたる資源警防及善隣工作」『建設戦』第9号, 1943年4月15日, 25頁
- 59 在北京日本大使館情報課「警防対策に就て 会社首脳部に希む」『建設戦』第21号, 1944年5月1日, 9頁
- 60 若松部隊長「鉄道防空の理念」『興亜』第52号, 1943年10月1日, 4頁
- 61 「防諜座談会」『京津事情』第4第巻7号, 1941年7月1日, 12-13頁
- 62 前掲隈元早苗, 16頁
- 63 前掲「北京大使館総務部長より指示せられたる資源警防及善隣工作」, 25頁
- 64 前掲 K 少佐, 10頁
- 65 都勝次「華北交通と治安強化」『興亜』第41号, 1942年11月1日, 4頁
- 66 高木健夫「八路の正体」『新華北』第3巻第2号, 1943年2月7日, 40頁
- 67 「前線と銃後の紐帯」『京津事情』第3巻第11号, 1940年11月20日, 34-43頁
- 68 柯「新秩序建設の基礎—中国知識人は斯く云ふ—」『華北評論』第1巻第1号, 1940年3月1日, 30頁
- 69 「柯」の姓を持つ当時の中国側の要人には、新民会首都指導部次長を務めた柯政和がいる。
- 70 「中国人の見た日本人」『興亜』第14号, 1940年8月1日, 7頁
- 71 林君彦「現地日本人の猛省を促す」『華北評論』第2巻第6号, 1941年4月1日, 14頁。「かつて日本を視察して来た某省県知事」の感想として、同様の趣旨の記述が前掲村上貞一, 49頁にもある。
- 72 燕京洞人「みたりきいたり北支縦横(洋車の巷)(1)」『京津事情』, 1940年5月1日, 34頁
- 73 加藤新吉「我等は日本人である」『興亜』第15号, 1940年9月1日, 1頁
- 74 鈴木善一「大東亜青年運動の実践機関を作れ」『北支那』第10巻第7号, 1943年7月1日, 26-27頁
- 75 中平常松「日華善隣に就て某中国人の腹藏ない意見」『建設戦』第21号, 1944年5月1日, 44-45頁
- 76 辛慕韓「四つの注文」『興亜』第62号, 1944年10月1日, 23頁
- 77 劉汝翼「優越感を去れ」『興亜』第62号, 1944年10月1日, 24頁。同記事に劉汝翼の肩書きは

- 記されていないが、華北交通社員会の中国語機関誌『新輪』によると、1944年1月時点では運輸局次長である。劉汝翼「車輛運用之効率応如増加?」『新輪』第6巻第1期、1944年1月、35頁。
- 78 霍新維「小さな愛情」『興亜』第62号、1944年10月1日、24頁
- 79 「対談 同盟条約と日華国民」『建設戦』第17号、1944年1月1日、38頁
- 80 「こんなに動いてゐるぞ」『興亜』第38号、1942年8月1日、26頁
- 81 前掲「対談 同盟条約と日華国民」、38頁
- 82 前掲柯、29頁
- 83 前掲華北善隣会「善隣工作は興亜運動なり」、4頁
- 84 山田耕民「敬天思想に就て」『建設戦』第11号、1943年6月15日、17頁
- 85 高建子「日華まごころ談義」『新華北』第4巻第3号、1944年3月7日、10-11頁。「高建子」が高木健夫のペンネームであることは、長崎武「『北京横丁』礼賛」『新華北』第3巻第9号、1943年9月7日、86頁にある「高建子こと東亜新報社北京本社主筆高木健夫氏」という記述から分かる。
- 86 北京大日本帝国大使館「日華善隣週間実施さる」『建設戦』第15号、1943年11月1日、6-8頁
- 87 前掲高建子、11頁
- 88 高木健夫「善隣序説一問題はわれわれが中国と中国人を好きになればいいのだ」『建設戦』第17号、1944年1月1日、21-22頁

参考文献

論文・研究書

- 堀井弘一郎「『大陸新報』の汪精衛政権批判記事と検閲体制」、高網博文、石川照子、竹松良明、大橋毅彦編『戦時上海のメディア』、研文出版、2016年
- 細谷亨「満蒙開拓団と現地住民」『立命館経済学』第64巻第6号、2016年3月
- 石川巧『幻の雑誌が語る戦争』、青土社、2018年
- 徐青「戦前におけるシャンハイ・イメージの一断面」『名古屋大学中国語学文学論集』第22輯、2010年12月
- 川村湊『海を渡った日本語』、青土社、1994年
- 川村湊『文学から見る「満洲」』、吉川弘文館、1998年
- 菊地俊介「日本占領下華北における在留邦人の対中国認識」『OUFC ブックレット 日中台共同研究「現代中国と東アジアの新環境」② 21世紀の日中関係—青年研究者の思索と対話—』、2014年3月
- 小島勝「上海の日本人学校の性格」、小島勝、馬洪林編著『上海の日本人社会』、永田文昌堂、1999年

小川直美「大陸の幻想—『支那在留日本人小学生綴方現地報告』から—」『大阪経大論集』第58巻
第7号, 2008年3月

秦剛「戦時末期の上海で発行された『大陸』」『早稲田文学』第20号, 2018年4月

高崎隆治「中国在留日本人と現地雑誌」, 大江志乃夫ほか編『岩波講座 近代日本と植民地』第7巻,
1993年

田中寛『戦時時期における日本語・日本語教育論の諸相』, ひつじ書房, 2015年

塚瀬進『満洲国』, 吉川弘文館, 1998年

和田博文, 徐静波, 西村将洋, 宮内淳子, 和田桂子『上海の日本人社会とメディア』, 岩波書店,
2014年

同時代資料

(雑誌の巻号, 出版年月は筆者が参照した中国国家図書館所蔵分のうち, 日中戦争期のもの. 中には欠号を含むものもある. 『新輪』は北京大学図書館所蔵分も加えている. 『京津事情』, 『日華文化』, 『北支那』, 『興亜』, 『燕塵』, 『華北評論』は日本でも国立国会図書館などに部分的に所蔵されている)

日本語

燕塵会『燕塵』第1巻第1号～第2巻第10号, 1941年1月～1942年10月

燕塵会『新華北』第3巻第1号～第4巻第6号, 1943年1月～1944年6月

月刊毎日社『月刊毎日』第1巻第1号～第2巻第8号, 1944年11月～1945年8月

華北評論社『華北評論』第1巻第1号～第5巻第6号, 1940年3月～1944年6月

華北交通社『興亜』第1号～第63号, 1939年7月～1944年12月

華北日本教育会『華北教育』第1巻第1号～第5巻第3号, 1940年8月～1944年6月

華北善隣会『建設戦』第1号～第31号, 1942年8月～1945年7月

北支那社(第5巻第9号より北支那経済通信社)『北支那』第4巻第10号～第11巻第6号, 1937年
10月～1944年6月

京津ガイド社『京津ガイド』創刊号, 1939年1月

京津事情社『京津事情』(第3巻第11号以前は巻号の表記なし)～第3巻第11号～第6巻第3号,
1939年6月～1943年3月

「日華文化」事務局『日華文化』第6巻第4号～第7巻第2号, 1943年4月～1944年2月

東亜新報天津支社編『華北建設年史』, 1944年

中国語

華北交通株式会社総裁室『新輪』第1巻第1期～第6巻第12期, 1939年6月～1944年12月

華北善隣会『敦隣』第1巻第1期～第3巻第2, 3期, 1944年1月1日～1945年2月

Contradictions in the “Friendship between China and Japan” Ideology Seen from Journals for Japanese in North China under Japanese Occupation

KIKUCHI Shunsuke*

Abstract

In the era of the Second Sino-Japanese War, many Japanese people migrated to Japanese-occupied North China, which was then ruled by a so-called puppet government propagating an ideology of “Friendship between China and Japan” that formed a public space for coexistence of Chinese and Japanese. To support “Friendship between China and Japan,” Japanese journals which were published in North China constantly criticized Japanese for their “erroneous sense of superiority” and for their disdaining the Chinese and tarnishing the image of Japan. However, the arguments in those journals criticizing Japanese attitudes exhibited the very same kind of disdain based on an “erroneous sense of superiority.” Furthermore, most of the arguments in the journals insisted on the importance of understanding differences between Japanese and Chinese, in complete contradiction of “the same race, same letter” theory which was one element of the “Friendship between China and Japan” ideology. Moreover, the journals insisted on the necessity suspecting Chinese who were becoming too familiar of being spy. So, while the journals argued for the importance of “Friendship between China and Japan,” many of their arguments conflicted with it. Beyond that, some articles showed Chinese hostility toward Japanese. In fact, the control over the speech and thought was not complete. On the contrary, the editorial slant of the journals was to listen to Chinese voices and make Japanese understand them. In the journals, Japanese authors also argued various matters including questions about the “Friendship between China and Japan” ideology and national policy.

Keywords

Second Sino-Japanese War, North China under Japanese Occupation, Japanese journal in China, Friendship between China and Japan, erroneous sense of superiority, circumstance of speech and thought

* Correspondence to: KIKUCHI Shunsuke
Postdoctoral Fellow, Faculty of History, Nankai University in China
No. 38 Tongyan Road, Jinnan District, Tianjin, P.R. China 300350
E-mail: 16v00232@gst.ritsumei.ac.jp